

※文字の大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真 1) (表 1) などと文中に記載し、右ページに(写真 1) (表 1) などと表記の上、貼り付けてください。
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
 ※いずれの場合も、必ず A 3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

エントリー学校名：

茨城県つくば市立秀峰筑波義務教育学校

活動名：

教師も学びを迫体験！
 ～社会に開かれた教育課程の実践～

解決すべき課題：

2中7小の統合で平成30年度に開校した本校は、本市の約4分の1の面積の学区であり、1100人を超える児童生徒が在籍する。新たな環境で、児童生徒相互の望ましい人間関係やコミュニケーション能力の構築、9年間の系統性を踏まえた授業実践と授業改善、保護者の理解と協力体制の構築等が課題である。

目標・方針：

開校以来、「義務教育学校の良さを生かした地域とともにある学校」を教育目標に掲げ、地域や保護者とねらいを共有し、9年間を見通した系統的な学びとカリキュラム・マネジメントに取り組む。

- (1)社会に開かれた教育課程として、筑波山地域ジオパークをつくばスタイル科（総合的な学習の時間）に単元に位置付けて系統的に学ぶことで、児童生徒は地域を理解し、地域の良さを発信することができるであろう。
- (2)特別活動やつくばスタイル科（総合的な学習の時間）で、異年齢クラスター制や異学年交流を通してコミュニケーションの場を充実することで、児童生徒の望ましい人間関係、自己肯定感が育まれるであろう。

活動内容：

- ・開校2年目における「義務教育学校の良さを生かした地域とともにある学校」として目指すビジョンを共有する研修の実施、及びSWOT分析を取り入れたRPDCAサイクルによるカリキュラム・マネジメント研修の実施
- ・異年齢クラスター制や異学年交流といった異年齢による協働の学びを通じた、児童生徒の望ましい人間関係やコミュニケーション能力の構築にむけた教育活動の実施

活動の成果：

- ・社会に開かれた教育課程として、地域の資源である「筑波山地域ジオパーク」を単元に位置付けた。筑波大学の樋口直宏教授をアドバイザーに招聘し、義務教育学校の9年間で学ぶ内容を系統的に設定した。地域で生きていく児童生徒に対し、地域を系統的に学ぶカリキュラムを創出することができた。
- ・教職員の研修では、学区内の史跡等に出向いて調査を実施し、プレゼンテーションを作成するなど、児童生徒の学習を教職員が迫体験する工夫を行った。指導方法の工夫改善や必要感のある研修を実施できた。
- ・特別活動やつくばスタイル科の学習において、異年齢クラスターや異学年交流を通して、相手意識・目的意識をもったプレゼンテーションを作成する中で、他者とのコミュニケーションの充実が図られた。
- ・児童生徒は、他者との交流を通して広大となった学区の自然や歴史、特産品等を学ぶことができた。また、保護者や地域の方々との関わりや発表を通して、自己肯定感を高めるような活躍の場を与えることができた。

アピールポイント（アイデアや工夫）：

- ・社会に開かれた教育課程である「義務教育学校のよさを生かした地域とともにある学校」の学習モデルの構築
- ・異年齢クラスター制や異学年交流による協働の学びの実践を通じた本校児童生徒の課題の克服
- ・児童生徒の学習内容を迫体験による、実体験に基づく理解とつまずきの予測による教員の指導力向上

1 校内研修の実際

(1) 校内研修による「つくばスタイル科」の学習の理念の共有
 社会に開かれた教育課程として、本校のカリキュラムへの地域の学習材の位置付けを年度初めの校内研修で共有した。【資料1】また、本校独自の単元化にあたり筑波大学の樋口教授に協力を仰ぎ、理論面を支えていただいた。

(2) 校内研修としての学区内実地踏査
 本校では開校年度に「秀峰筑波かるた」を作成した。広大な学区となった地域の歴史・文化遺産や特産品を児童生徒が楽しみながら学ぶことができるよう、児童生徒と保護者、地域、学校が連携し、延べ3000人の手により完成した。実際に学区の調査を行う児童生徒と同様、かるたを起動教材として活用し、教職員で学区内探検を行った。【資料2】実際の学習や調査を行う際に児童生徒がどのような困り感を感じるかという視点でグループ内討議を行ったことで地域理解を深めるとともに教材研究としても研鑽を深めることができた。

(3) 児童生徒の学習の迫体験としてのプレゼンテーション
 「つくばスタイル科」では、「IN-ABOUT-FOR」の学習の流れをベースに課題解決型学習で学んだことを表現する活動を行う。校内研修では、児童生徒にも見せるという相手意識・目的意識のもと、実地調査を行った教員の小集団でプレゼンテーションを行ったことで、教職員の必要感に応えつつ、指導力向上につながる研修を行うことができた。

(4) SWOT分析を取り入れたカリキュラム・マネジメント研修【資料4】
 本校の1年間の取組を振り返り、RPDCAサイクルをもとに次年度の教育課程を検討するためSWOT分析を行った。統合型義務教育学校の強みと支援的要因を全職員で共有できたことは、カリキュラム・マネジメントの観点からも効果的であったことが教職員アンケートからも明らかとなった。

2 児童生徒の取組

(1) 異年齢による協働の学び
 本校では、異年齢クラスターとして縦割り異年齢集団を編成し、協働による学びの場を設けている。2中7小が統合して間もない本校の児童生徒にとっては、特別活動等での児童生徒相互の関わり合いを通してよりよい関係づくりの場を設定することが重要である。つくばスタイル科の単元に筑波山地域ジオパークでの筑波山実地踏査を位置づけ、5～7学年ではクラスター班による調査活動を実施した。また、2・3学年では地域の特産品の福来（ふくれ）みかんを食育と関連付けた実践を行った。児童と生徒が関わる場を意図的に設定したことで、コミュニケーション力を高めながら調査内容をプレゼンテーションで表現することができた。

(2) 保護者や地域、大人の方々に向けた発信【資料5】
 相手意識・目的意識をもってプレゼンテーションができるよう、異学年に向けた発表や校内プレゼンテーションコンテストを実施した。また、文化祭や新入生保護者説明会や、視察の際には他県や海外の方に英語で発表する機会を設けるなどの場を与えたことで、児童生徒の自己肯定感の向上を図ることができた。



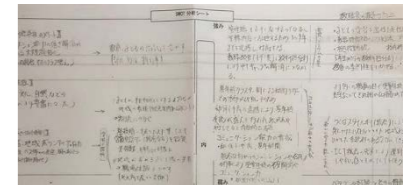
【資料1 理念の共有】



【資料2 実地踏査】



【資料3 体験をプレゼン】



【資料4 SWOT分析】



【資料5 生徒によるプレゼン】